中村俊定文庫
文庫18
569

天明元

東園、一長共撰

句作諸病

全

恬憺虚無心氣從之精心内を守則り病安く從来
む〳〵なるかな水清しといへとも動く時は濁を
生精心ゑしけれとも肝の脈に風をつかさとれ
ハ動きあきより病を防く事顔淵も叶はすされ
よ詩たに教たる其慈ちすといふ事なし　こと
に俗諺平和をたゝむか爲の仏なれは師も常
に俗にして俗ならす　和を知て矩をこえすと
君臣佐使に分て四時の養を教ゆ　春い独活坊
風のにほひに鼻をひこつかせて肺をやしなひ

車前大黄の下葉は眼と敬ハして肝を春めか
す秋は牽牛子を栂て朝な〳〵の心地補へは朝
飯をすゝむとかや、菊きちかふ牛膝等いふ
にや及ふ　荻萩かるかやわれもこふ数ならぬ
艸にも蒼苔はめうか夢は夢夫〳〵の功なら
てはと十も長もわれかちにかりあつめ百艸と
はなりぬ、是を章て句の病をしりそけ心を向
上の一路に極ハしめむとのみ

天明之丑長月

湖上山人東園述

源東園

句作諸病

理屈

ほたる火のよくは消すし水の中

鳴(暗カ)き足りにとなりすれたき鳥

写言

花散てわか葉に戻る桜かふ

枯条や冬ハ来ふるも其通り

常ノ形

むつ七つ下りてむ食やわ日の鳥

長〳〵と蚊は咲たり松の枝

日本古典文庫

MARUZEN I

句論

たまさかに鳥等つゆ棄山子哉

月ろに射とめられたる鹿もなし

倦ク場

寒かりぬ雪と詠るさくら哉

半蔀に燕あふなし　子規

格式

尊さに御法の庭の蓮かな

河豚汁の匂ひやゆかし雪の夜半

句ノ苦ミ

春風を荷ふて来るや房賣

むし壺の虫によはせて通ひけり

句ノ甘ミ

夜に乗風のつかむ芒もなし藤の棚

雨ふりし翌は芳野もさりながら

句ノ祈ぶり

書をよめば淋しうもなし秋の暮

元日や我い恥すれ古布子

首切し

咲ならふまた半輪やけふの菊

MARUZEN I

春か
背の隅田鷺つらせつゝ都鳥

冠着ス

夏の頃夜ハ明し花平木

詠れは月のやとりや木々の露

袴着ス

干しものに降てハ晴るゝしくれ哉

尉とのゝ歌の黒さよ煤はらひ

皆はかす

梅咲や雪解る日のあたゝかな

夕京にかハほり飛や暮のかね

海なき句

行秋や神もそろ〳〵旅用意

老陰の素矢し一筋冬至弓

二作ノ句

湖の青田に出来て雲の峯

川の名の玉とこそ之れ鮎のをし

三作ノ句

後の世を夏に乗るも鉢扣

病人に餅振舞ハん山さくら

切り字

包井やほとく時また星の影

ゆる――おかれぬ筍や生へ所

等類

にハりより上に伏うつ峠カナ　俗

夕立を目の下に見る峠かふ

夜ゝヤアルカ砧ノ里一ツ　第四

庚時に昼ハなしゆやうしくれ時

秀句軽口ノ類

蜘の巣や靭軒に木の葉のひいつら、　むかゝり

上を下忍いとふ山の花見哉

古事つかはれたる句

月代の冠を衝くさむさ哉

初汐や　惜カ　明たるおもひきり

虚ニ似タル實　実ニ似タル虚ハイフに虚ニ似タル実ハイフヘカラスト名摂ノ申サレシトヽ

鶯口へ風の含める落葉哉

山雀やくるみをいける山はたけ

俗ニ云　穴サカシ

白牛世尊取ノ附会　仏先て鳴らして通る手水鉢

引たての錫ヨ上望い人通り

雅言ノヌメリ

しみち葉　横ばな　春霞　こち風　氏教之

俗談ノイヤミ　元俗中ノ俗

自慢ヲ　佩ヲ　六ヶ敷ヲ
ミソ　ムダ　ヤカマシ　此数之

詞ノ主

夕朝　朝サシ　物梅　盈嵐　此数之

艸の辞

初春に七草を乗しより思ひそめて今爰にも色の艸を競駈けらし葉ハ緑花ハ紅ひの色（折葉有病葉あり難て云（難くの）汝非情にして病ある事ハかに草等乾坤に孕るゝ身の世の然のかたれし且ハ蟷螂の鎌にかけられ夕アヨは鉸虫の鉸る花盗人有将茶立虫ハ茶を喰ゝ米つき虫は米喰にもあらすはたありつゝれさすとも咎我葛葉をかゝ伏猪の為ゝハと布ゝ芳れは斯之（布）にくき姿とハなりぬ　恨なきは篭風そかし

おもふにこゝね毒の栄花も王虫の果報も氏は皆草はなゝすや　敷くゝ其家の園に蚕し根を移し快く戦く春秋を得たゝと流るれは月後鳥啼て逃水と死なりにけり

丑の秋　風太郎　兎十述

蕎匂ふ下枝坊

艸の花水仙ひとり　秋の艸　東園

秋なすひかりを菊の世としらす　宛十

朝かほの一意地こゆる夕ゝ哉　一長

岳のむかしかたらふくさの花　俳文杉　柳雨

毛燭をしきさとはせて花望かふ　池上　春車

さらさらと風にすれけり蕎茨仁　元雨

百官の花望にそけておゝなへ　桂州

朝点や端端に咲てもすけなかし　梅子

秋待て赤ふゝ咲かす野菊かふ　笠蘭

秋海棄之つめし顔のわらはやゝ　烏明

あきのくれ萩とすゝきも秋の世　百明

朝かほの倦れぬ内としほみけり　野逸

咲時は音しなゝき桔梗かふ　徳布

花の世にひるかゝしたり菊作　文母

雨の野路かるかやひとり有の侭に　長州　暁堂

百姓の月に朝がけや稲の花　梅人

我侭に咲てちいさし菊のはな　梅門

実生から七変化て菊のはふ　一里

○

くわられて一人ぶたり男へし　素丸

菊提て菊一ぶとのあるし哉　夢太

MARUZEN I

大尾

夢もの〻数〻入らず萩の花　宗瑞

夫題を得句案する時題案し方あり　外を是と
し内を非とし定めたれと三千世界をあちあ
くりて得たる句は廣く又内を尋て秘密を得れ
は新し　されとも初心として内に遊〻は古く
へおちる事多くせて又趣向を得句耳作る時死
法の法あり水仙やといひ水仙華といふにても
知るへし、爰を俳諧の大事といふせ　や文

字遣ふとし粉ひのやあり法定のや貴のや薄の
やあれは心を入れねはあやまり多し　句は芸
の負なれは題を得て芸をするをおもし

二月菴一長述

天明丑秋　印　印

半紙本十六丁綴

第本　松宇文庫

MARUZEN I